JFMA FORUM 2011 講 演 概 要 書

記入日：2010年12月30日

●代表者氏名(ふりがな)　似内志朗（にたないしろう）

●所属企業・団体名　JFMA調査研究委員会ユニバーサルデザイン研究部会

●部署・役職　部会長

●e-mail　s-nitana@d8.dion.ne.jp

●ＦＭの経歴（100字以内）

2000-01：郵政事業庁で環境配慮型施設(ゼロエネルギー郵便局等)、ＵＤ導入を担当。
2002-04：日本郵政公社のＦＭ体制構築（マクロ戦略、ＬＣＣ、ＢＳＣ、オフィス改革、余剰空間活用等）　担当。
2003-現在：ＪＦＭＡ活動
　(ＵＤ研究部会長、ユーザー懇談会、WWP・ＪＦＭＡフォーラム企画委員、ＪＦＭＡ賞専門委員、ＨＦＭＡ顧問等)

●発表者氏名（ふりがな）：　似内志朗（にたないしろう）

●タイトル：(30字以内)　「ユニバーサルデザインを解くキーワード」

●発表のねらい：(100字以内)

ユニバーサルデザイン部会では「オフィスのユニバーサルデザインの価値を明らかにし、導入のための道具立てをつくる」ことを目標に活動してきました。部会のこれまでの活動・思考の中で見えてきたキーワードから、新たな視点を提示したいと思います。

●発表内容概略：(500字以内)

ユニバーサルデザイン部会では「オフィスのユニバーサルデザインの価値を明らかにし、導入のための道具立てをつくる」ことを目標に活動してきました。部会のこれまでの活動・思考の中で見えてきたキーワードから、新たな視点を提示したいと思います。

<u>①ＵＤの価値を「見える化」する</u>　：いまだに輪郭のはっきりしないＵＤというもの。ＵＤをユーザーにとっての性能と考え、評価システム（ＣＡＳＵＤＡ：ユニバーサルデザイン総合評価システム）をつくり、ハードとソフト両面から、定量化・格付け評価をします。今後、新たに「オフィス評価＆ビル評価」として、評価基準のリバイズ、可能であればＵＤ認証制度化をしたいと考えています。

<u>②オフィスＵＤは「Design for each」</u>　：ＵＤは「Design for all（すべての人たちのためのデザイン）」と言われます。しかしオフィスはユーザーが特定しやすい、つまり個々のワーカーのためのカスタマイズが可能なのです。universalよりも一歩進んだpersonalise、つまり「Design for each（それぞれのためのデザイン）」と定義でき、その視点がＵＤの概念を広げることでしょう。

③生産性に影響する「オフィスの基礎性能」　：オフィスには能動的性能と受動的性能があります。能動的機能とは経営ビジョン共有化、コミュニケーション活性化など、受動的役割は安心感、つかいやすさ、不快な要素がないなどです。オフィスのＵＤは後者とほぼイコールです。オフィスを語る時、前者ばかりに目が行きがちですが、後者が必要条件であることを忘れてはなりません。能動的性能（十分条件）は受動的性能（必要条件）の上に成り立つからです。

④ＵＤは儲かる（義務からＣＳＲへ、ＣＳＲからビジネスへ）　：昨年ＪＦＭＡ賞を受賞した「ソラーレホテルズ・アンド・リゾーツ&スパ」では、施設のアクセシビリティ向上改修、高齢者・障害者のための積極教育を行うことなどで、客室稼働率が2割から8割にアップしました。顧客ターゲットを明確にしてニーズに応えた事例ですが、これからの高齢社会のビジネスにおいて、ＵＤはより有効なツールとなることでしょう。

⑤ＵＤはダイバーシティを寛容する「大きな器」　：ダイバーシティ（多様性）が経営、そしてオフィスマネジメントの重要な概念となっています。言語・文化・習慣・性別・年齢・個性・障害の有無などに関わらず働きやすいオフィスとは何でしょうか。私たちはＵＤを、ダイバーシティを寛容する「大きな器」と考えています。

⑥ＵＤは「社会性/汎用性」　：公共空間においてすべてのユーザーが使いやすい、ユーザーを排除しないということが求められます。ＵＤは公共空間のアクセシビリティ・ユーザビリティを確保し、社会性を与えます。そしてオフィスにおいても、ＵＤ水準は「オフィスの公共性」、「オフィスの汎用性・普遍性（universality）」を計るモノサシになります。

⑦ＵＤへの疑い（使いやすければ良いとは限らないか）　：社会のすべてのモノは、使いやすければ良いのでしょうか。社会正義としてユニバーサルでフラットな社会は必要です。しかし個人レベルで見れば、「ゆるい環境」が人の能力を退化させないでしょうか。社会から奥行きをなくさないでしょうか。重要なのは「個人の能力と取り巻く環境の相対的関係」です。より個人レベルに進化したＵＤは考えられないでしょうか。